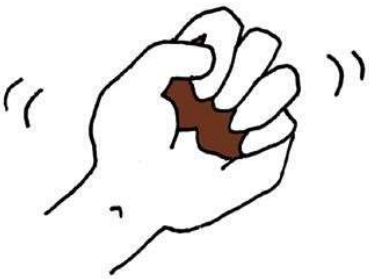
土壌を整えよう

土の状態を知ろう！

よい土の見分け方

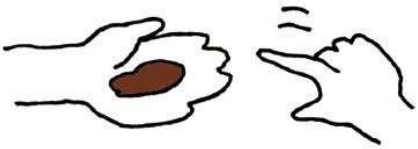
土の粒と粒が団子状にくっついた大きな粒を団粒といいます。団粒構造の土は、粒の細かい単粒に比べ、排水性と保水性を兼ね備え、通気性も高いです。団粒構造かどうか、排水性が高いかどうかは簡単な方法でチェックできます。

・土を握ってみる



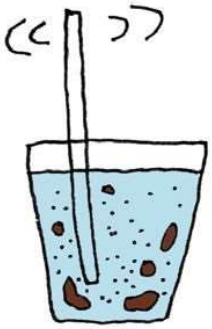
１適度に湿った土を手に取り、
ギュッと握ってみる。

２固まったら保水性がよい土、
固まらなかったら保水性が悪い土。



３固まった土を指で軽く押し、
くずれたら団粒構造の土、
くずれなかったら単粒構造の土。

・上澄み液で見る



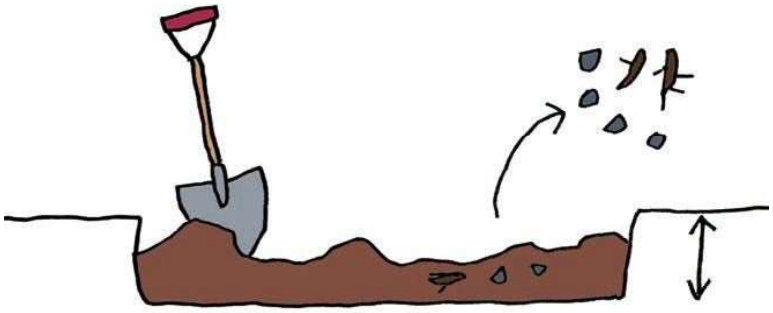
１コップに土と水を入れて
かき混ぜる。

２沈殿するスピードが速く、
上澄み液がきれいなものほど
団粒化した土。

土づくりをしよう！

土づくりは花づくりの基本です。今まで何も植えられていないようなところや、土が硬くなっているようなところは、土壌改良が必要です。

30cm くらい掘り起こして耕し柔らかくします。雑草や木の根、石などは取り除く。

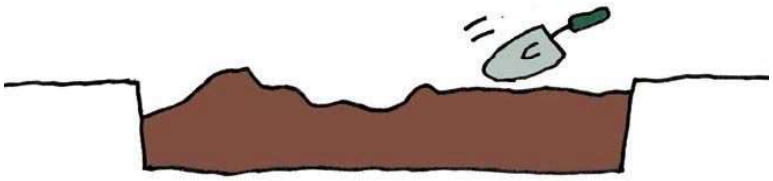


腐葉土などの有機物を、1㎡あたり 20L 程度混ぜ合わせる。

粘り気の多い土（水はけの悪い土）は、パーライトを1㎡あたり 10L 程度加える。

粘り気の少ない土（水、肥料もちが悪い土）は赤玉土、ピートモスなどを 1 ㎡あたり 20L 程度加える。

酸度調整には苦土石灰を 1 ㎡あたり 100g 加える。（年一回程度）



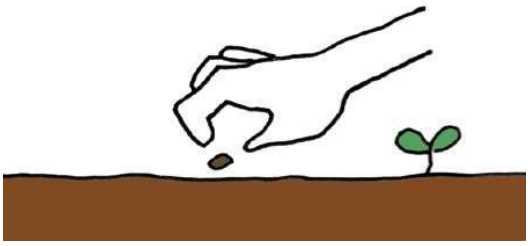
元肥には、緩効性肥料（固形肥料）を 1 ㎡あたり 50g か、化成肥料を 1 ㎡あたり 100g 混ぜ合わせる。

苗を準備しよう

苗を準備する方法は２つあります。

苗を購入して植える

種をまいて育てる



種まき用の容器　　地面に直接まく。
資材を使う。

次ページから、種まき用容器（セルトレイ）を用いての育苗方法を紹介します。

よい苗の選び方

避けたい苗

ヒョロッとして株元がぐらつき、節と節の間が間伸びしている。

よい苗

全体ががっしりしていて、株元からよく分枝し、葉の色が濃い。

種からの苗づくりに挑戦しよう！

1　種まきを成功させるコツ

植物の発芽には、水、酸素、温度の３つが必要です。

1　清潔な用土を使う！　　→病原菌を持ち込まないこと。
2　適期に種まきする！　　→過度な高温や低温では発芽しません。
3　種に土をかけすぎない！　→種の種類により覆土の量が異なります。
4　乾燥させない！　　→発芽するまでは絶対乾かさないこと。

2　種まきに必要なものを準備しよう

□　セルトレイ

□　種まき用土

□　バーミキュライト（覆土用）

□　種

□　竹串 or 爪楊枝

□　新聞紙

□　霧吹き

□　バット　（セルトレイが入る大きさ）

3　種まきの手順

①　種まき用土に水をなじませる

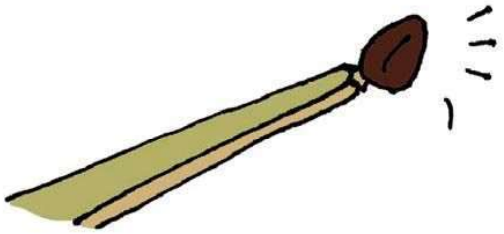
用土を軽く握って固まる程度の水分がベストです。
種まき用土は、ピートモス（ミズゴケが湿地で体積、変質したもの）を主原料としたものが多く、ジョウロで水をかけても吸水しにくい性質があるためです。

②　セルトレイに種まき用土をつめる

均一につめることが重要です。特に外側のセルには十分用土をつめるようにしましょう。
セルトレイは、用土をつめる前に必要な分だけ切り分けておくと無駄がありません。

③　セルに種をまく

草花の種は野菜に比べると小さいものが多いです。まきにくい場合は、濡らした竹串の先端に種をくっつけてまきましょう。
押し込む必要はありません。
種の保存状態が良ければ、発芽率は高いので１個のセルに１～２粒ずつまいていきます。

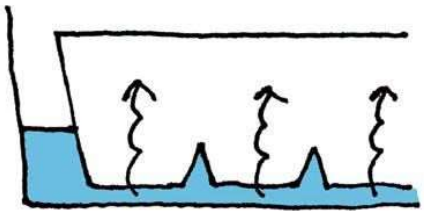


④　土をかぶせる

光が当たっているとうまく発芽できない種には、土をかぶせます。
バーミキュライト（鉱石を加工して作られる無菌の用土）で覆土します。
覆土が厚すぎると発芽がそろいません。種が隠れる程度の薄い覆土を心がけましょう。

⑤　水を与える

水を張ったバットの中にセルトレイを浸けます。ジョウロなどで上から水をかけると、種が流れてしまいます。セルトレイへのかん水は、発芽がそろうまで底面吸水をおすすめします。



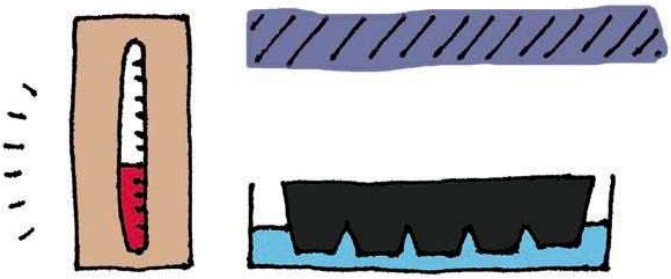
⑥　新聞紙をかぶせ、霧吹きで濡らす

新聞紙で覆っておくことは、乾燥を防ぐ上でもとても効果的です。
ただし、発芽をし始めたらすぐに取り除きましょう。徒長（日照不足などから、植物の茎や枝が間伸び）して軟弱な苗になってしまいます。

4　種まき後の管理

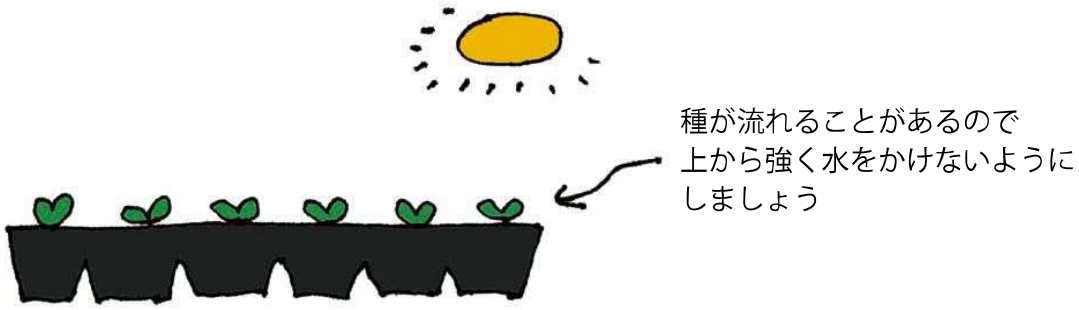
○　発芽するまで

種の種類にもよりますが、20℃程度に保つと３～14 日で発芽します。
また、発芽までは十分な水分が必要です。
適切な場所に置きましょう。直射日光や雨の当たるところは厳禁です。



○　発芽してから

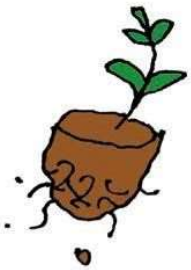
外部の環境に慣らしましょう。徐々にかん水量を増やし、徐々に光に慣らしていき、日光に当てましょう。
乾いたらかん水することが基本です。３回に１回程度薄い液肥をかけましょう。



苗を植えつけよう

植えつけの基本

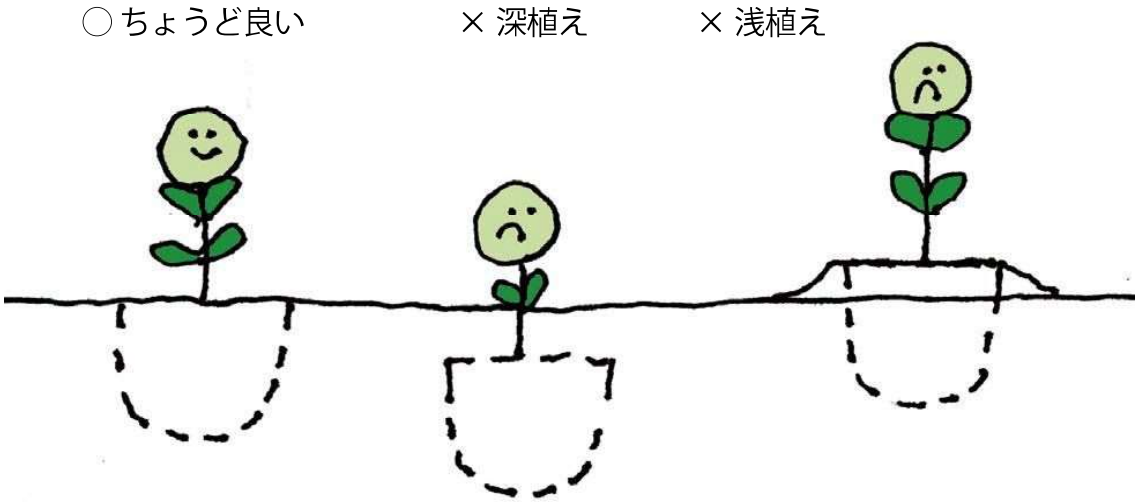
植えつけ前日に湿らせます。



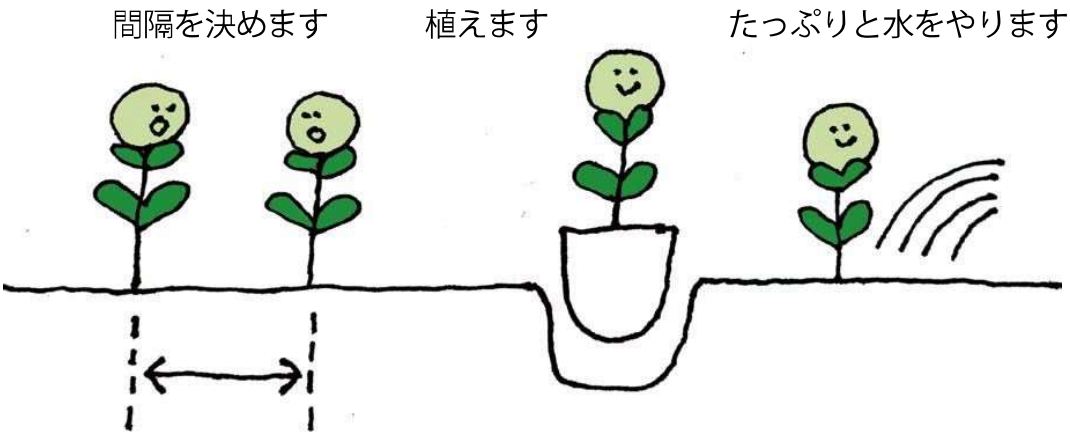
根がまわりすぎていたら底面や
側面をほぐしましょう。

根元にたっぷりと水を
与えましょう。

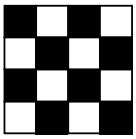
植えつける深さは、苗の地際（根元）に表面と花壇の土の表面が同じになるように植えます。深植えになったり、逆に水をやったときに周りの土が沈んで苗の根鉢に部分が浮きでてしまうような浅植えにならないように注意しましょう。



花壇・植樹帯への植えつけ



基本は、20〜25cm



苗の配置は、千鳥植えにすると通風や採光が良くなります。
植物が育つ大きさを考えて間隔を決めましょう。

かなり横に
ボリュームが出るもの

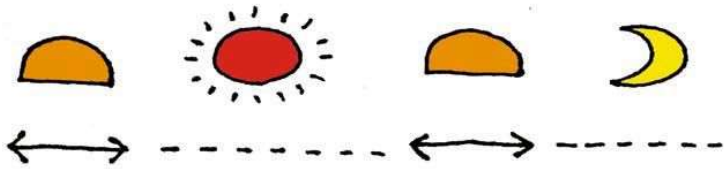
姿があまり
変わらないもの

ルピナス 宿根草などの 植え替え不要な 植物	ノースポール マリーゴールド ビオラ ジニア ペチュニア ブルーサルビア ポーチュラカ ニチニチソウ	サルビア キンセンカ センニチコウ ワスレナグサ キンギョソウ	プリムラジュリアン シクラメン ミニハボタン
30cm~	25cm	20cm	15cm

苗を植えてからの日々のお手入れ

1　水やり

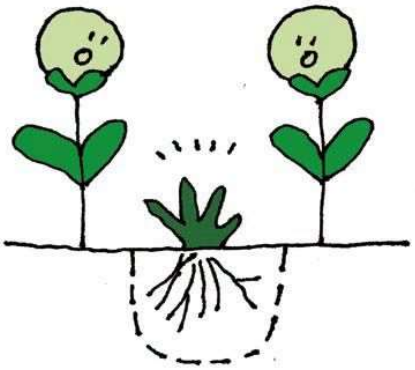
水やりは植物の根元に、朝や夕方の気温の高くない時間帯に行いましょう。
土の乾燥は、目で見る、触ってみるとわかりやすいです。葉がしおれ気味になったら水やりが必要です。



頻繁に水を与えすぎると根が弱くなったり、葉や茎がぬれた状態が続くと病気の原因になります。「乾いたら　たっぷり　株元に」水を与えましょう。

2　除草

雑草は土の栄養分を吸い取ってしまうほか、花壇の見栄えを悪くしてしまうので、根ごと取り除きます。雨が降ったあとなど土が湿っていると取りやすいです。なるべく小さいうちに取りましょう。



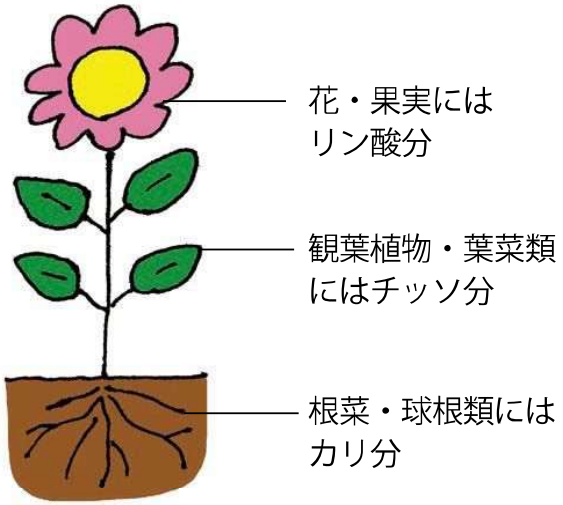
花壇の場合、株が地面を覆ってくるまでの間に、いかに除草するかがポイントとなります。熊手などで株間を軽く耕すことで、雑草の発生を抑えられます。空気の通りも良くなり、花の根の生長も促進されます。

３　肥料

肥料はその成分の働きに応じて、植物が最も必要としているものを、最も必要としている時期にほどこすのがポイントです。また、肥料の効き方は①ゆっくり長時間効く「緩効性」、②効き始めるのが早い「速効性」、③効き始めるのが遅い「遅効性」の３タイプがあります。固形肥料は緩効性、液体肥料は速効性が一般的です。

○　追肥（ついひ、おいごえ）

花期の長いものは肥料を定期的に与えましょう。肥料切れを起こさないように苗を植えてから１～２ヶ月後程度を目安にしますが、最初に与えている肥料の量にもよるので、植物の状態を見て調整しましょう。薄い液肥をかん水がわりに与えるのも効果的です。



○　施肥のサイクル例

植物名	春	夏	秋	冬
１～２年草 ペチュニア ベゴニア サルビア	植えつけ 追肥	開花 追肥（開花期の長いものは続ける）		
宿根草 マツバギク ナデシコ	植えつけ 追肥	開花　生育中 追肥	追肥	越冬 やらない
宿根草 ゼラニウム	植えかえ 追肥	開花　休止 追肥	開花 追肥	越冬 やらない

４　花がら摘み

パンジーやベゴニア、マリーゴールドなどは、次々と新しい花を咲かせてきます。同時に古い花は次々と枯れてきてしまいます。咲き終わって枯れた花は花がらと呼ばれ、残しておくと病気やカビの発生源になったり、種がついて花つきが悪くなってしまったりします。

①　花が老化してきたら花がらを摘みます

花の根元から摘み取ります。花びらだけ取っても種ができてしまうので注意しましょう。マリーゴールドの場合は花の部分だけを摘み取ります。

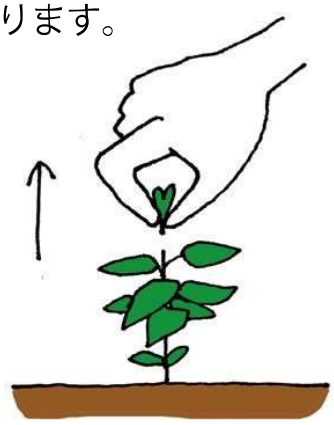
②　摘み取った花がらは残さないこと

摘み取った花がらに病原菌が繁殖してしまいます。確実に捨てましょう。

５　摘心・切り戻し

○　摘心

サルビアやダリア、キンギョソウなど、丈が高く生長する植物をそのまま育てると、上に伸びるばかりで花も少なく、バランスの悪い株姿になってしまいます。あらかじめ小さいうちに、一番上の芽を摘み取ってやりましょう。わき芽が生長し、ボリューム感のある株姿になります。



芽の先端部分だけを摘み取ります。
ハサミは使わず、指先やつめを
使って２葉だけを摘み取りましょう。

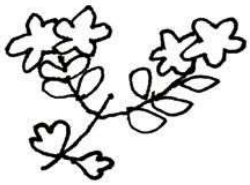
○　切り戻し

花苗は植えたままにしておくと、いつの間にか姿が乱れたり、間伸びしたりするので、乱れた枝を切り詰めます。

ペチュニアの場合

草姿が乱れてきたら
切り戻しを行います

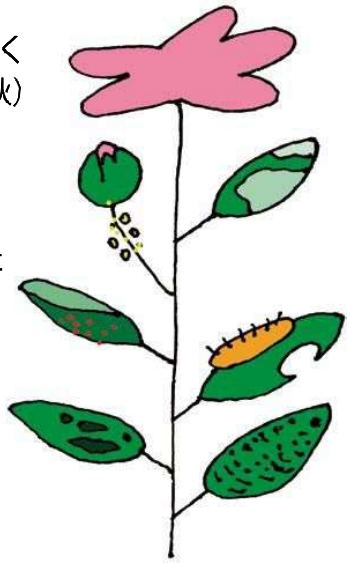
茎を 1/3 の長さに
切り戻します
この時肥料を与えます



わき芽が生育し、
一斉に開花してきます
また乱れれば繰り返します

6　病害虫対策

植物の元気がないな、と感じたときは原因を突き止めて、適切な対処をすることが大切です。管理方法を改善すれば、元気になる場合も多いです。農薬には病気用と害虫用があります。病気用には予防効果がありますが、害虫は発生した後からの散布でないと効きません。



虫　小さくて茎や蕾に多数つく
アブラムシ（春・秋）

虫　葉の裏にごく小さな虫がつく
葉の色が白くかすれた
ようになる　**ハダニ**（夏）

病　黒くなって腐り、
だんだん広がる
細菌による病気

病　葉が白っぽくなり、
だんだん広がる
カビによる病気
うどんこ病など（春～秋）

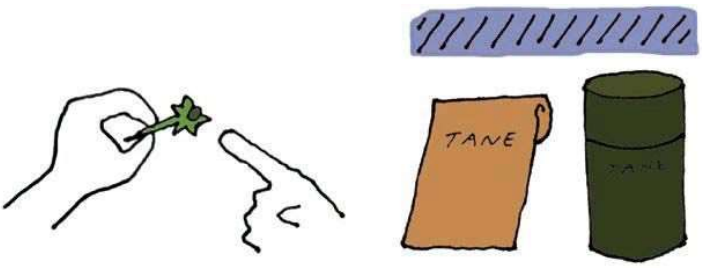
虫　大きくて葉を食べる
アオムシ、ケムシなど
（春～秋）

病　モザイク状の模様が出る
ウイルスによる病気
（特効薬がないので、
株ごと処分する）

花が終わったあとのお手入れ

１　種とり

花が終わったもののうち、いくつかの花がらを摘まずにおくと種ができます。褐色になってきたら花茎から切り取って日陰で乾かし、種をとります。



種の保存は乾燥と低温が必要です。茶筒や紙袋などに入れて冷暗所に保存しましょう。

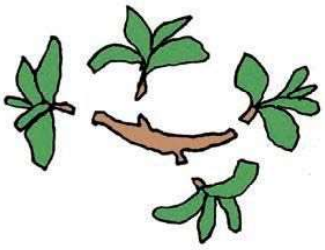
ペチュニアなどは熟すと自然に種を飛ばすので、その前に実をとりましょう。

２　株分け（多年草・宿根草）

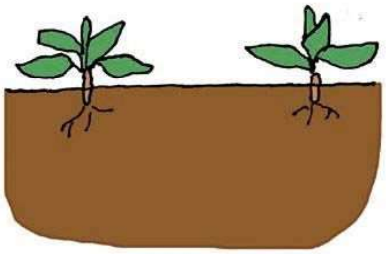
多年草や宿根草は、長期間植えたままにしておくと株の中心部が枯れたり、根詰まりを起こして生育が悪くなりがちです。植えつけて２～３年経ったら、一度株を掘り上げましょう。堆肥や腐葉土などを入れて耕し、土の状態を良くしてから、古い葉や傷んだ根などをとって植え戻します。
このとき、大きくなりすぎた株は株分けを行いましょう。多年草は花が咲き終わった直後で一段落ついた頃、宿根草の多くは、秋または早春に行います。１株に２～３芽がつくように手かハサミで分けます。

宿根草の株分け

根茎で増えるタイプは、注意深く掘り起こす。



２～３芽つけて、分岐部分を切り分ける。



新芽が伸びるゆとりを持って植える。

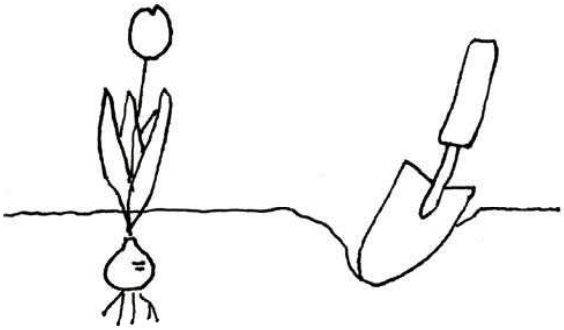
３　あとかたづけ（一年草・球根）

一年草のあとかたづけ

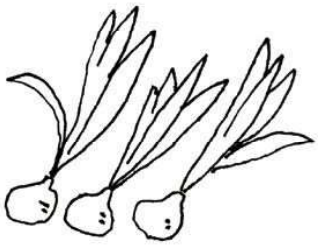
花が咲き終わった一年草は根ごと掘り起こし、土を落として処分します。花壇の土は全体的に掘り返しておきましょう。

球根を育てよう

球根を太らせるためには、花後にすぐ葉を切らずに、しっかり管理をします。

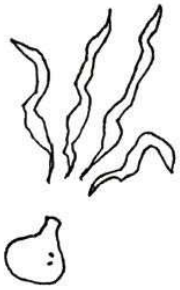


花後にカリ分の多い肥料を与える。

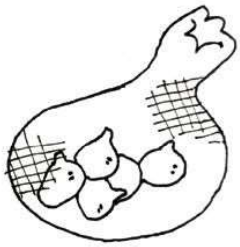


葉が 1/3 ほど枯れたら球根を掘り上げる。

葉をつけたまま、一週間くらい日陰で乾燥させる。



葉が全部枯れたら切り落とす。



ネットに入れ、風通しの良いところで貯蔵する。